

治癒切除例の n(一) 群の 5 年生存率は 53.5% であり、又、m, pm 群は全例生存していた。

(8) Bin 2, 3 にたいする放射線療法を検討したところ、姑息的に腫瘍を切除し放射線治療を行った群に延命効果が認められた。

38) 当科における胆道癌症例の検討

藤田 敏雄・伊藤 博 (厚生連糸魚川病院)
穂苅 市郎・島田 一郎 (外科)

昭和59年4月より、当科で取り扱った胆道癌症例は12例で、胆管癌8例、胆嚢癌4例であった。胆管癌8例の癌占居部位別内訳は、肝門部胆管癌1例、中部胆管癌4例、下部胆管癌3例であった。肉眼的癌進行度は、Stage IV 症例が8例中5例で、5例全例が上・中部胆管癌であった。切除症例は8例中6例で、治癒切除術となったものは4例であった。予後は、生存中6例で、最長生存例は1年である。

一方、胆嚢癌症例は2例が Stage I, 他2例が Stage IV で、Stage I の2症例に治癒切除術が施行された。病理組織学的には、癌深達は1例が m, 他の1例も SS 症例で、共にリンパ節転移もなく、予後も9カ月及び1年2カ月生存中である。

39) 当科で経験した肝・胆・膵領域癌の検討

大溪 秀夫・白井 良夫 (立川総合病院)
唐仁原 全 (外科)
伊賀 芳朗・内田 克之 (新潟大学)
岡村 直孝・遠藤 和彦 (第一外科)
西巻 正・佐々木公一

当科において過去2年半で経験した、肝・胆道・膵領域癌は25例である。その内訳は、肝癌:2例、胆のう癌:10例、胆管癌:5例、十二指腸乳頭部癌:2例、膵癌:6例であった。

肝癌は2例ともに肝切除を行ったが、1例は直死であった。残る1例は術後2年健在である。胆のう癌は5例に切除を行い、2例に肝床切除を伴う根治手術している。2例は術後の組織で胆のう癌と診断された。非切除例は全例 Stage IV で再発死している。切除例は4例健在である。胆管癌は2例に PD が行われているが、1例は1年4カ月で再発死、1例は4カ月生存中である。非切除例は3例とも死亡。乳頭部癌は1例に PD + rt. hepatic lobectomy (H₂ のため) 行った。しかし、1年で再発死している。膵癌は2例に膵全摘、1例に体尾部切除を施行。術後、2年5カ月に筆頭に健在である。非切除例は3例とも死亡。肝癌の1例を供覧する。1年間で胆石、肝癌、右結腸癌で3回手術した症例である。

40) 県内胆道癌調査結果

一胆道癌危険因子解明の試み一

加藤 清・赤井 貞彦 (県立ガンセン)
島田 寛治・佐々木 寿英 (ター新瀉病院)
佐野 宗明・田島 健三 (外科)
筒井 光広

県内胆道癌外科症例のアンケート調査を行い、昭和57~59年3年間の胆嚢癌312例(男89例、女223例)、胆管癌300例(男150例、女150例)について集計した。保健所管内別分布では胆嚢癌は津川>新津>村上>長岡管内に高く、胆管癌は栃尾>村上>新潟>六日町・十日町管内に高かった。

これら症例中の胆嚢癌70例(男24例、女46例)、胆管癌54例(男29例、女25例)に50項目余のアンケート調査を行い、各項目毎に健常人と比較した相対危険度の近似値(Odds 比)を求め、有意性検定を行い1対1の症例対照研究による胆道癌危険因子の解明を試みた。

胆嚢癌では胆石の既往、妊娠、出産、授乳、井戸水(昔)、インスタントラーメン類、米飯の回数が高危険度を示し、魚、肉、卵、牛乳、野菜、果物、水道水(昔)が低危険度を示した。

胆管癌では胆石・肝臓病の既往、痩せ、山菜が高危険度を示し、魚、肉、バター、野菜、果物、肥満が低危険度を示した。

41) 進行膵癌に対する術中照射療法

阿部 要一・霜田 光義 (富山医科薬科大学)
鈴木修一郎・榑淵 統一 (第二外科)
桐山 誠一・田沢 賢次
藤巻 雅夫

伊藤 博 (新潟県厚生連 糸魚川病院外科)

進行膵癌16例に対しライナック電子線による術中照射療法を施行し、その意義について検討した。対象は Stage IV の進行癌で、肝転移(H)、腹膜播腫(P)を6例に認めた。切除2例のうち1例は膵全摘の数週間前に40 Gy の照射をし、他1例はPD後 SMA 根部を中心とした後腹膜へ40 Gy 照射した。非切除14例中3例に30 Gy, 11例に40 Gy の術中照射、術後7例に2~30 Gy の体外照射を追加した。除痛効果は75%に認められ、腫瘍マーカーは照射前高値例では照射後に全例減少した。術後1年以上生存は4例で、1例はPD施行後1年4カ月生存中、他3例は非切除で、40 Gy の術中照射に30 Gy の術後照射を加えた。H, P 陰性例である。